

白南準における禅

— その作品から —

榎 本 香 織

ナム・ジュン・パイク（白南準）にとつてのジョン・ケージとの出会いは、後の彼の全ての活動と人生を方向付けたという意味において大きな転換点であるといえるが、その中でも特に彼から影響を受けたのが東洋思想、特に禅の思想である。ケージの所属する前衛芸術集団「フルクサス」は、六〇年代アメリカの思想潮流を代表するオルタナティブ・カルチャーの一つであるが、その中においても禅が大きな位置を占めたと評価されるようになったのは、その主要メンバーであったJ・ケージの影響に依るところが大きい。

ケージは鈴木大拙との出会いを機に禅、特に華嚴思想に傾倒し、音楽家としてのみならず哲学者としての様相をなしている。ケージやフルクサスの禅受容の在り方は、純思想的な見地に立てば多くの誤解を孕んでいるものではあるが、それらを糧として生まれた豊かな成果は看過することはできず、例えば今日日常的に見られるコンピュータ・グラフィックの基礎となったパイクのビデオ・アートも、そうした成果の一つである。そして、禅の思想がなければ彼の中でビデオ・アートは誕生も熟成もされなかった事実は注目すべき点であるにもかかわらず、ほとんど言及がなされていない。

ここで重要なのは、ケージ経由の禅は、パイクの自己の中で

いかなる位置を占めたのかを確認することである。後にパイクも加入するフルクサスはそもそも「流動」「浄化」を指す言葉でジョージ・マチュエナスが当時の世相やエリート主義的芸術からの脱却の意味を込めて命名したとされる。本発表で「不確定性」を中心に掲げたのは、この不確定性（偶然性）の觀念自体がフルクサスにおいても重要なコンセプトの一つとして掲げられており、「フルクサス的」「禅的」なそれが互いの境界線を融解させたまま機能しているためである。パイクにおいて禅の不確定性がどのような文脈で吸収されたかを知る事は、彼の作品や思想を理解する上で重要であり、ここでは一・生い立ち、二・ケージと禅との出会い、三・フルクサス時代、四・その後の展開の観点からパイク自身の言説を中心に考察する。

パイクの禅受容は、ケージ同様対抗文化の文脈から解釈されるべきものであるが、ある時期までノマド的な生を強要された東洋人・韓国人としての個人的アイデンティティの問題が強力に絡んでくる点でより複雑な様相を見せる。ケージと異なり、その実践に哲学的な深みを敢えて見せないパイクではあるが、禅への問題関心は一生を通じて探求すべきテーマとなった。晩年になるにつれて韓国的・東洋的な文化にも接近する事になるが、それは単純な自己の出自への原点回帰というよりは、洋の東西をコラージュし、ありのままの姿をよしとする、パイクなりの不確定性の解釈と実践であるとも取れる。パイクにおける禅、特に不確定性に対する追求の姿勢は、それが彼の複雑な生い立ちを肯定した強力な精神基盤でもある事を含めて鑑みれば、フルクサスの掲げた「偶然性」のコンセプトよりも

第12部会

一層深い、自己の存在意義のレベルにまで根差す性質のものであった。

近代思想における児童文学の宗教性

大澤 千恵子

児童文学は、その源流にフランスの *Contes de fées*・ドイツの *Märchen* などを含んでいるが、それらは「文学的おとぎ話」*literary fairy tale* であり、それ以前の口承の物語を発生源としながらも近代以降再構成された物語の形式である。その成立は、ルイ一四世の治世末期のフランスで、シャルル・ペローの物語集 *Contes* がその草分け的存在である。ペローは、宮廷の権力の中核にいたエリートはあったが、新興勢力としてのブルジョワジーであった。ブルジョワジーは、宮廷文化と民衆文化との接合をはたして近代文明を成立させたといわれるが、ペローによる「文学的おとぎ話」もその特徴が色濃く表れている。

その特徴として、以下の三つのものに対する憧憬が挙げられる。まず、一点目は、「過去」に対する憧憬である。原題の「過ぎ去りし時代の物語」からもわかるように実際には、非常に当世風の、ルイ一四世の宮廷生活を彷彿とさせるような場面を取り入れていたのだが、過去の物語として遠隔化されたのである。「むかし、むかし、あるところに……」という今ではお馴染みの冒頭のフレーズは、一瞬にして聞き手を現実時空から

引き離す役割を持っているが、これはペローによって様式化されたといえる。

二点目は、「民衆」に対する憧憬である。前者に先駆けて手稿本として出された「鶯鳥おぼさんの話」の扉絵には、農民風の年配女性が数人の上流階級の若者や子どもたちにお話を聞かせている様子が描き出されていた。これは、自然な生活の象徴である農民、素朴な民衆に語り継がれたものという、今日における昔話・民話の一つの類型的なイメージである。同じくこれもペローの知性によって機知に富み、洗練化された物語となっていたにも関わらず、確立されたものだ。

三点目は、「子ども」に対する憧憬である。ペローはこれらの物語自体を「素朴な、子どもの物語」と呼び、物語の聞き手、あるいは教訓の享受者として「子ども」を意識していた。ペローは近代思想における子ども観の素地をつくった先駆けなのである。

以上のように、ブルジョワジーの文化・芸術・教育に対する高い関心と読み書き能力によって洗練化され、普及した「文学的おとぎ話」は、「過去」「民衆」「子ども」への憧憬をその根底に内在させながら、独特の物語のプロットやテーマやモチーフを構築し発展させたのである。遠い過去、素朴な民衆、あるいは子ども時代への憧憬は、近代人が喪失してしまったと感じている自然状態への回帰願望である。だがそれは、失われた自然そのものがもっているものに要因があるというわけではない。むしろそれらを他者として差異化し、遠隔化し、それを再統合しようとした近代人の心性の中にこそより鮮明にイメージ